

浄土

1977 - 3

第四十三卷

第三号

昭和十年五月二十日 第三号郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌)第三二五号
昭和五十二年二月二十五日印刷 昭和五十二年三月一日發行



S. Ku

忍

鈴木錦承

(愛知県渥美町真如寺住職)

人の一生は、重荷を負うて、遠き道を行くが如し、いそぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。堪忍は無事長久の基。いかりは敵と思え。勝つことばかり知って、負くることを知らざれば害その身に至る。おのれを責めて人を責むるな。

これは三河の岡崎城の出身、徳川家康公の遺訓であります。正に人生の世訓であると思います。どんな苦難に遇っても、じっと忍び耐えて、自己を反省し、人の心を想うて事に処して行く時、自ら道は開けて行くものと思っております。先師先輩の導きと、友の交り、人々の好意のおかけを忘れることなかと私は心に言い聞かせているのであります。



鈴木



三 月 号



目 次

法然上人の念仏救済……………	井川定慶……………	(2)
△彼岸法話△彼岸への道……………	綿野得定……………	(4)
生と死……………	柴田哲彦……………	(8)
鼎談△マスコミ文明からの提言△現代浄土教文化論(第二回)	寺内大吉・松浦行真・宝田正道……………	(12)
浄土教の流れ△十五△食木の虫……………	竹中信常……………	(18)
お教のページ……………	大日経……………	(23)
宗祖を偲びて——元黒谷青竜寺参拝記……………	渡辺静枝……………	(24)
△読者の便り△ニューオーリンズの墓……………	磯貝基教……………	(27)
△随想△心のままに〔二〕……………	川内知光……………	(30)
法教術語補遺(二)……………	宝田正道……………	(32)
念仏ひじり三國志(三十五)法然をめぐる人々……………	寺内大吉……………	(37)

表紙 久住 静雄画

カッパ 大正大学美術部



法然上人の念仏救済

井川 定一 慶
かわ じょうけい

(仏教大学教授・文庫)

法然上人が浄土開宗をされた平安末期にあつては、婦人は男子から差別されていた。

石童丸刈道心の物語を聞いて分るように弘法大師の霊場「高野山」へは女人禁制であつた。比叡山にあつても同様で法然上人の母堂泰氏が美作国から遙々上洛されてきたが、登嶺出来ず面会もしないで帰国されたということの一部の伝記が物語っている。他の古寺、霊場でも同様であつたことが察知される。これは若い修業僧の目に綺麗な女性の姿が映ると遂に迷いの心がムラムラと起ることを恐れて、「女人は罪が深いから近よせてはなら

ぬ」というのであつた。思うに婦人の罪が深いのでなく煩惱を起す男性に罪があり、つまり男性のエゴイズムから霊山へ女人禁制を定めたものである。

仏教の經典には「一切衆生悉有仏性」と老いも若きも男も女も平等に取扱われて救済の御利益を蒙るべきであるところから、法然上人は山を下つて吉水の里（今の知恩院のあたり）で念仏を弘宣せられるに際し、「男も女も平等に救はれて阿弥陀浄土に殺生できますぞな」と申されたので、京洛の女性達が大いに歓喜し念仏の法門がバツト世間に広く弘まることになつたのである。

法然上人の念仏法門が弘まるにつれて、時の関白九条兼実公を始め、お天子様にも招かれ、円頓戒を授け、天皇・上皇・法皇様のお剃度の師とまで仰がれるに至った。

源頼朝が平家を滅ぼし鎌倉に幕府を開くや、嘗て平重衡が焼き払った奈良の東大寺の大仏殿を再建しようと念願し、表向きには故白河法皇様を勸願主となつて頂くように手筈をきめたところ、法皇様も大へんお喜びになり聖武天皇の昔に戻しえるために是非実現せんと御決意された、その大事業の建設委員長兼勸募委員長ともいうべき「大勸進職」を当時最も人氣の集まっていた法然上人に交渉されるのであるが、上人は「大へん結構なことだが、私にはただ今お念仏を弘めるということで一パイはあるです。折角ながらご辞退します」というので、上人の代りにお弟子の俊乗坊重源が大勸進職を拝命し刻苦精勵の甲斐あつて立派に東大寺大仏殿の落慶に至る。その晴れの法要の日になり、勸願主後白河法皇、真のスポンサー源頼朝將軍とその夫人政子、そして法然上人は奈良に下り会合せられることになった。

法要のあとの記念講演ともいうべき法座の際に、法然上人は会同者を前に、「お念仏を称えれば男も女も共に平

等に救済されますし、弥陀の前では男も女も区別がない」と強調された。これを聴聞して、政子は痛く感動し、鎌倉へ帰ってから後、上人へ自分の信仰について二、三お伺いを立て、上人も早速お返事を出されたことは、『勸修御伝』に記すとおりである。その後、鎌倉幕府では三代將軍実朝の不慮の死に遭い、後継者がなく止むなく京都の公卿から幼少の四代將軍を迎え、実権は政子が握った。政子は夫頼朝の没後は落飾しているから「尼」である。そこで世間では政子を「尼將軍」と呼びだしたという。

法然上人によつて婦人の地位が向上したから、女であっても政權の座につくことになる。法然上人の念仏の法門はかくて全く婦人を男子同等のところまで引き上げたのである。当時上人は「罪は十惡五逆のものも生ると信じて少罪をも犯さじと思ふべし」と諭された。

この論法によつて嘗て戦場で殺傷をなし武勲を立てた武將、殊に熊谷直実も上人の弟子となり蓮生と改名して殊勝な念仏者になったし、河内国天野の四郎という強盜殺人の凶惡者も上人の教えを蒙り教阿弥陀仏として上人の代りに鎌倉へ下向して念仏を弘めるという、今でいう更生保護の立派な行いを果たされている。



一 彼岸法話一

彼岸への道

わたの
綿野 得定 じょう
(山口県長門市向岸寺住職)

一 彼岸とは

立春を過ぎたと申しながら、日本列島は、異常な寒波に見舞われて、幾十年ぶりの、低温記録が続いております。この様な寒さに、うちふるえておりますと、一日も早く春の暖かさや、お浄土のような花の春が待たれます。

お彼岸の句として知られる。

春彼岸 菩提の種を まく日かな

はあまりにも有名です。我が国の、仏教行事として、よく知られておりますのは何と云っても、お彼

岸でしょう。

永い冬の暗さ、きびしい寒さに堪えて一輪二輪と開きそめる花のすがたは、人間社会のうそ、いつわり、冷酷、無情の中で、平和としあわせを求める様子にも似て、彼岸が慕われ、無条件に、求められたのでしょう。

その彼岸とは、理想であり、真理であり、悟りの世界であり、お浄土です。

釈尊の説かれた仏法は、人の心に、やすらぎを与えられ、そこに幸せを感じしめられたのです。その道行きを六度の修行として、お示しされたのです。

仏教を要訳すれば、『般若心経』につづまり、『阿弥

陀經』(『正説浄土經』)と共に、我が国で最も広く読まれているこの『心經』末文の偈文に、

“行け行け 彼の岸に行け、

彼の岸には、

彼岸(めざめ)が待てるならん”

と、理想の世界への歩みは、六種の修行を経て、たどりつこうという自分へのめざめであり、自己開発にあるのだとするひじりの道として受け入れられたのです。

迷い、くるしみ、不安の現在が此岸であり、この此岸からの脱出の方法が六種の渡しです。

むづかしく、きびしい修行の道を、ひじりへの道、難行の道とするに對し、今一つ、凡夫と自覺し、反省するところに、仏と同居する浄土の易行の道ありと、主張された他力の道が鎌倉時代に法然上人によって開かれました。

二 六種の修行

布施(めぐみ)、持戒(きまり)、忍辱(にんじやく、たえしのび)、

精進(はげみ)、禪定(おちつき)、智慧(かしこさ)六のつの修行――

人間は、迷いの世界に住みながら、迷いに気付かず、常に物心両面の幸福を求めるか、精神の安定を得ようとしております。むづかしい修行をやりとげて、心動かさぬ真理を会得するか、限らない欲望をもつて、心の満足をみたそうするか二つです。中世に代表される僧侶、智者、学者、権力者、指導者たちは(一握りの達成者を除いて)墮落や、失敗、奪い合いの様相をさらけ出していたといえましょう。その結果、派閥(はつわ)を生み、政權と結び、権力者たちに取り入り、僧侶の自分を見失ってゆきました。

歴代天皇の中で、屈指の英邁なみかどとして有名な御白河帝をして、*“加茂川の水と、叡山の山法師は、余の意のままにならぬなり”*と、嘆かせたと伝えられるなど、修行者の自分を見ることさえ、できませんでした。

源平争乱を頂点として、日本全土が、奪い合い、殺し合い、不安と焦燥の渦となった鎌倉時代に、法

然上人が生誕されたのです。岡山県の山奥の平和郷であるべき里も、人間苦は差別なくおしよせたのです。

九歳の少年、勢至丸（法然上人の幼名）の父、漆間の時国公が、人手にかかりあえなく亡くなられたのです。その上、武士の習いの仇討禁止というきびしい遺言を課せられ、出家、得道へとすすまれたのです。それは、ひじりへの求道の道と、派閥、栄達の墮落の道のまじり合う現実が、僧侶としての師の前に、大きく立ちはだかるのでした。現実が、亡父の遺言解決に何の緒にも与えず、怨親平等も、彼岸への修行も、凡夫、大衆救済にも、程遠く感ぜられたのです。

学究と、実践活動とが、法然上人の全半生となり、やがて、他方浄土教が開かれ、称名念仏が、彼岸、浄土への道として示されました。

三 浄土への道

宗祖の御法語に、

たとえ百千万遍、念仏をはげむとも、自力の心で申す念仏は、自力の念仏なり、たとえ一遍、十遍の念仏でも、他力の心で申す念仏はこれ、他力の念仏なりとあります。

法然上人は、自身これ凡夫なりとの大自覚の上に、十惡造罪の凡夫、愚痴の法然房が、念仏することにより、仏の如来、加被護念の腕の中なることを明かされたのです。

理想を求め、彼岸の世界をめざして、修行を完成する在来の教えのあまりにもけわしくむづかしいことを、叡山に入行されて始めて、体験され、この道は、所詮、老若、男女、貧富、貴賤をとわず、実践することの不可能であることを、まづ説明されました。その最下の凡夫が称名、念仏する限りには、浄土の仏と同座する他力の世界の妙味を、説明されたのです。悟りへの一枚切符が、幸福の条件であるにもかかわらず、幸福の本質そのものだとの誤解を、示されたとき、仏と自坐のすばらしい価値観が生まれ、毎日が合掌で受け止められたのです。

毎日が、せねばならぬというノルマのような考えから、せすにはおれない欣びの日々と変らせて頂けるのです。

幸福を、青い鳥とし、条件として、追い求めた昨日までが、ガラリと変身されて、我が家の窓辺に止まっていたのだと、気付かせられる、彼岸への道は、足下に開けていたのです。

花咲く春も、紅葉散る秋も、み仏の世界の一分身とすれば、鳥歌い、蝶の舞うすがたも、み仏が説法の会座であると思えば、今現在説法の経文も、生身の如来のみ声と受け取られます。

「我れたとえ、死刑に処せられるとも、この言（「念仏称名」云わずば、あるべからず）」として、敢然と念仏申され、七十五歳の御老体が一言半句の、愚痴も出ず、永年都で念仏教化して、地方への教化の縁がなかったのが、このたび、朝恩（「天皇のおかげ」）で四国の僻地に赴けるのだと、日常のすべてを最上の価値視をもって、相対しておられます。

極楽から来て、極楽へ還るのだと仰せられた法然上人こそ、浄土の道を、私たちに教えられた、世界の大宗教者ではないでしょうか。

仏と同座の称名仏念をすれば、心がおのずから柔軟となります。相手へのいたわり、めぐみの心にみちて、共に菩提心をよるこぶことができましょう。そのようにすれば、相手意識さえ消えうせて、一体観に立てれば、きまりを守ること、我が身を見ることになります。

そしてせすにはおられない、じつとしてはおられないはげみの心が盛んになってきます。かくして、無理、難題と思われたものが、我が力をためす場であると気付かれると、腹立ちがきえ、堪え、ゆるすことができましょう。

素直さ、あるがまま、無条件の喜びが、心騒がず、受けとめることの出来る尊い心と、ならせていただけます。

称名一途の心は、彼岸の修行を内蔵して、即、浄土の実感が得られるのです。



生と死

○

あのいまわしい太平洋戦争が終了して今年は三十二年目になる。三十二年という歳月はけっして短かくはない。昭和五十年度の経済企画庁『国民生活白書』によれば戦後三十年にして戦争を体験してない世代が国民の五十パーセントを越したという。日本が悲惨な戦争を体験したということは事実である。しかし、ややもすると時の流れといおうか、何か遠いところで我々に直接かわりあいなく行われたことのように感じられてしまう。

しかし、寺院に生活するもの達にとって、今年が日本が戦争を体験し、しかも敗戦したことをいやおうなしに

想いおこさせられる年なのである。なぜならば、終戦の年の戦争犠牲者が三十三回忌にあたり、寺などでその人達の供養がつとめられるからである。このような年回は一年前くらいから多くなっているが、これは当時の戦況を如実に示しているものといえよう。

このようなことを考えながらある日、ふと靖国神社参拝をおもいたった。日頃書籍さがしに、近くの神田神保町の古書店街までは月に何回となく足を向けるが、そこからほど近い神社まで参拝することはかつてなかったのである。参拝しおわって、さて境内の一隅に目をやると、十数人の年輩のご婦人達が何やら掲示板に見入って

柴^{しば}田^た哲^{てつ}彦^{ひこ}

(大正大学講師)

いるのを見た。しかも、よく見ると、大半が目には涙さえ
浮べながら入るように掲示を見つめている。なんだ
ろうとその集団の中に入ってみると、そこには昭和二十
年五月十一日南西諸島方面で戦死の、金沢市出身神風特
攻隊海軍大尉牧野鯨命氏の遺書が掲示されていたのであ
る。その遺書の全文は、

○出撃の前日

御父上様、御母上様人生わずか五十年とは昔の人の
言ふ言葉、今の世の我等二十年にしてすでに一生と
言ひ、それ以上をオツリと言ふ。まして有三年も永
生きせしはゼイタクの限りなり。いささかも惜しま
ず、笑つて南溟の果に散る。また楽しからずや。金
沢の備中町、材木町小学校の頃、一月おきぐらいに
病氣をして弱かった頃、また千葉の家の前のグミの
実など、潮干狩のこと新潟の永き思ひ出、明大に於
ける生活、下宿、岐阜のこと、寺の娘、釣りのこ
と、いろいろと断片的に思ひ出されなかつしく、目
を閉すれば眼前に浮び上ります。ただただ御両親様

の御健康を祈るのみ。

お父様の例の御病氣（なんでもこわす短氣病）は今後
お慎み下されたく、御母上様の御心痛察するにあま
りあり。一緒に死ぬのは斉藤幸雄一等飛行兵曹と
て、二十一歳の少年？ かわいい男です。何故か私を
したって大部前から一緒に飛んでいます死ぬのも
一緒です。

○出撃の朝

敷歩に行くような、小学校の頃遠足に行くような気
持なり。

○三〇〇朝めし。すしを食った。あと三時間か四時
間で死ぬとは思へぬ。皆元氣なり。

（昭和五十一年三月社頭掲示）

この遺書を涙しながら読んでいた年老いたご婦人達に
まじつて、自分もこれを一気に読んでしまった。

ごくあたりまえの人間ならば、死ぬことほど恐いもの
はない。現代医学をもつてしても、不治に近い病氣
「癌」の患者に対して、最後まで病名を知らせないこと

も、それを裏づけているといえよう。しかし、この死の

せまった二十三歳の青年の遺書を読んで、人間の心境をうかがうとき、そこには普通の人間がいなく、死への恐怖といったものは少しも感じられない。また軍人としての虚勢をはったものでもけつしてない。むしろ「遠足に行くような気持」と記しているが、その言葉が率直に彼自身の心境を的確に伝えているものと考えられた。しかし二十三歳の若い青年が、どうしてこのような心境になって死の恐怖もなく死にとびこんでいけたのであろうか。この問題は何も三十二年前だけの問題ではない。人間が存在するかぎり、いつでも、だれにでも、かわる問題なのである。その遺書を見たことによって、あらためて問題を提起された思いがして、九段をあとにしたのであった。

○

人間は死にのぞんで、心をどのようなにもつべきなのであろうか。これは人間にとってきわめて重大な問題である。しかしまた非常にむづかしい問題であって、たやす

く解決する問題でもない。

浄土宗の宗祖法然上人は建暦二年（一二二二）一月二十日八十歳で往生された。

晩年の法然上人の身辺は決して平穏なものではなかった。七十二歳のとき「元久の法難」、七十四歳で「建永の法難」、七十五歳より示寂の前年まで配流の身となり、住みなれた京都離れての生活であった。帰洛されたのは示寂の二ヶ月前の建暦元年十一月二十日のことであったが、帰洛後急激に老衰されたのは、晩年の苦勞がかさなったことが原因と思われる。

法然上人の伝記である『四十八巻伝』によると、示寂の一カ月前にはご自身で門弟達に往生極楽の信念を披歴されたことを記している。このように死期をさとられてから往生までの法然上人がどのような心境でいられたのか、それこそ「聖意はかりがたきこと」であるが、できるかぎりそれを知る努力をし、味わうことが、我々自身の問題を解決する糸口となるのではなからうか。

死期をさとられてからの法然上人で特筆すべきこと

は、たびたび高声念仏をされていることである。もちろん四十三歳で専修念仏に帰入されてから念仏することが日常であった。むしろ念仏そのものが生活であったというべきであろう。「不浄の中での念仏」など、そのような法然上人を象徴する特記すべきエピソードといえる。

さらに法然上人は病床に臥すと念仏の声も小さくなつてしかるべきであるが、病をおして、衰弱をおして大声を出し、念仏されたことが伝えられている。法然上人は『選択集』の中で『大集経』の「大念は大仏を見、小念は小仏を見る」という文を引き、大念とは大きな声で念仏すること、小念とは小さな声で念仏することだ、と述べている。法然上人は刻々と死がせまってくると、衰弱した病床の中で、最後の力をふりしぼって大声で念仏されたということは、ひとつの解釈として「大仏を見る」ためであったとも考えられる。

法然上人が死にのぞんで、心にあつただひとつのことは、生涯つらぬいてきた口称の念仏によって、まぢがいなく往生極楽をはたし、浄土で阿弥陀仏と共に生きら

れること、その確信のみで心が充たされていたのではないだろうか。念仏を称える声が大きからうと、また小さからうと同じようにも思えるが、法然上人の決定往生の心からおしはかれば、大きな声で、即ち高声念仏しつつ往生をはたさうと思われたのではないだろうか。

○

ところで、太平洋戦争で戦死していった若者と、法然上人の心境を比較することは到底できることではない。しかしいづれも死を恐れてはいなかった。若者には自己を犠牲にして日本全体を救うという使命感が大きく彼の心を支配したであらうし、それに、ただ一人で死んでゆくのではなく、共に死んでゆく、友人のいることが大きなさえであつたろうと思われる。法然上人も死ぬことにより、弥陀と共に生きてゆけるという確信があり、いづれも死が孤独になることを意味していなかった。同行二人という言葉があるが、こんなところに我々が考えなければならぬ示唆を感じるのである。



現代浄土教文化論

(第二回)

——“南無の再発見”ですか。たしかに、念仏そのものがすでに新しい出発として登場したのですから、現代においてもそうした新鮮な感覚ということが求められるのは当然ですね。しかも、その新しい発想というものは、たとえば鎌倉時代の法然上人の教えの中にすでに内在していたということなんでしょうねえ。

談 鼎

寺^{てら}内^{うち}大^{だい}吉^{きち}
(作家)

松^{まつ}浦^{うら}行^{ぎょう}真^{しん}

(サンケイ新聞編集委員)

宝^{たから}田^だ正^{まさ}道^{みち}

(浄土宗出版事業協会主幹)

松浦 そう、そうするとボク自身の側にも新しい発見がもたらされると思いますよ。

宝田 その意味では、具体的には布教教化の姿勢というものが、もう一度問われねばならぬということですね。たとえばその布教の方法として、実際に現代文明の中で生きてこられた方々の体験談のうちから、新しい仏教のあるべき姿を見出そうとする作業なども、ひとつの手っ取り早い方策なんじゃないでしょうかねえ。

松浦 仏教のいろいろなむずかしい話は専門書があるわけですが、しかもそれは、その後にくるべきもので、その前の段階として信仰の実際のあり方を教示してくれるものが欲しいわけなんです。

宝田 入り口としての玄関をまず開いてやるということですね。

松浦 その意味ではこの『浄土』という雑誌などは、もともと有利な立場に立ったものですよ。現在では、宗教的な雑誌ではないんだが、むしろ人生観、宗教観を直截に問いかけている『PHP』とか『インナー・トリップ』などの一般の諸雑誌が、そうした意味で注目

されているわけですからねえ。それは、人間の向上心というか、「何かを求めて」という志向に根差して出発しているんですね。しかもその「何かを求めて」ということが、うちなる心に向けて問われている時代でもあるわけですよ。

——なるほど、宗教的な雰囲気の入りを示唆してくれるもの、ということですか。しかし、それは大変むずかしい作業でもあると思いますが……。

宝田 ともかく宗教への入り口を簡潔に教えることこそ、今一番必要なことなんです。

松浦 そのところの智慧のしほり方ひとつで、この『浄土』誌の売れ行きも何万部ということになる可能性もあると思いますよ。(笑)

寺内 そう、そうなんだ。そこで思いだしたんだが、例のチャックの世界的メーカーであるYKK(吉田工業)の吉田社長が出している月刊小冊子があるんだよ。それが『隣人』というおもしろい雑誌でね。そこで盛んに主張しているのが、「多数決制議会主義」の大反対ということなんだ。民主主義の本当のあり方は、少数というか、ともかくひとりでも反対意見の持ち主がい

たらダメだというんだね。全員賛成の上ではじめて事が成り立つ、という姿勢を絶対くずさないというわけなんだ。

松浦 しかし現実社会ではなかなかむずかしいことだけれど……。

寺内 うん、そうなんだが、宗教の世界においては、こういう吉田工業のあり方に通ずるものがあると思うんですよ。つまり、お釈迦さまの教えを受けることにおいても、たとえば仏典作成のための結集の場合においても、やっぱり全員賛成、全員納得ということでもあったんだと思いますよ。そういうのが宗教の世界の基本ルールだったと思いますよ。

松浦・宝田 たしかにそうだ。

寺内 ともかく全員OKというすがすがしい現実があるわけですよ。

松浦 そうなんだ。ともかくも宗教的な問題に関しては絶対的世界ということなんだな。

寺内 そこで、いえば現代のこういう物質文明の世界の中で、吉田工業というところではそういう全員OKのいさぎよいあり方を目指しているんですよ。そこにボ

クは共感するわけだが……。

宝田 ああ、そういった意味で考えれば、そうした實際の話をうまく利用して、たとえば喩え話というか、ひとつの宗教への導入口として使うことによって新しい布教、あるいは新しい信仰運動へとつながらないものかなあ。

寺内 そんなんだね。広く色々なことに目を向ける姿勢が大切なことはもちろんだが、ほんのつまらぬことの中にも教えられるものが多いことはたしかだ。

宝田 そう、だから具体的にはむずかしい仏書のこまかい解説とか、難解な用語を使った説明では意味がないんですよ。寺内先生がいわれるように、一歩さがって脇からものを考えていくような発想が大切ですよ。

寺内 そういうことでは、先ほどの「南無阿弥陀仏」ということに関しても、専修念仏をはじめ強調された唐の善導大師なども、その信仰姿勢というか、教化姿勢はまことに新しかったわけですよ。当時においてはたいへん画期的な登場だったと思いますよ。

松浦 そうだね。

寺内 そこでだけれど、善導大師なども「南無」という

ことを具体的に唱導したのかなあ。

宝田 それはねえ。先頃中国へ行かれた仏教大学の藤堂恭俊先生にお聞きした話なんですが、現在の中国では「ナムオミトフエー」と発音しているそうですよ。

しかし、当時の唐の時代においては実際に唱名していたかどうかは、疑問とするところもありますがね。ともかく念仏ということは盛んに強調していますよ。

寺内 なるほど。

宝田 ともかく『観経疏』の最初にもでてくる「道俗時衆等」と記された書き出しなどにしても、善導大師の現実世界の教化の姿勢はまことに積極的であつたはずですよ。それは寺内さんのいわれたように、当時としては大変新しい仏教を構想していたわけですよ。

松浦 そうですね。新しい改革者としての面がありますね。

——ちょうど、私たちの浄土宗では、昭和五十五年（一九八〇）はこの善導大師の千二百年のご遠忌の正當にいたしますし、『浄土』誌の方でも、これにちなんで幾つかの企画も考えているわけなんです、そうした意味では善導大師のそうした新しい感覚に答える

べく、『浄土』誌においても斬新な教化姿勢が要求される場所ですね。

宝田 そこなんですよ。

寺内 最終的にはもちろん現代人のそれぞれの心の中にあって、形成されるべき信仰心なんですが……。たとえば、この阿弥陀仏という絶対者への憑依の想いにして、実はこれがなかなかむずかしくて、実際にはできにくいことなんだが。

宝田 そこで工夫すべきところは、一遍に阿弥陀仏の世界へということではなくて、先ほども述べましたように、「入り口」というか、最初の「道しるべ」という次元においての努力か、いまやもっとも必要な時代だということですね。

松浦 そう、そうなんだ。新聞や雑誌なんかの企画も、一個の人間の宗教心というか、信仰心という視点においてはなかなかこなれていないんですね。

——そういう宗教感情というか、根本の宗教心という問題がやはり最後に問われてくるわけなんです、その方策において苦慮する前に、そのことに取り組もうとするわれわれの側の意志のようなものが、ま

ず強く喚起されなければならないということでしょう。
うか。

松浦 そうなんです。まず心を発（おこ）す、「発心」

ということですね。それがひとつの道を求める出発点ですからね。どうしてもここが基本なんです。今、みなさんと色々お話ししてまいりまして、ボクの心には何かある種の感情——まあ「憧憬」というか「あこがれ」といったようなものがおこってききましたが、これはボク自身ですでに何か下地があるのかもしれないけれど……。それは、ある意味では「近づいている」と「つまり「死」ということと対してなんだが。

宝田 「近づいていること」といえば、私なんかも毎朝新聞の朝刊を手にとって、かならず見るのは例の「死亡広告欄」ですよ。（笑）

松浦 そう見ますね。

宝田 ともかく実感として見るんですよ。

寺内 死が別世界のものではない、他人ごとじゃない、そういう実感なんだなあ。

——逆に今こうして生きているんだということにありがたさもおこってきませんか。

松浦 そう、たしかに生きていることへの感謝もしかりですが、それと同じように自分が死んだあと残っていくものに対しての「いとおしさ」のようなものがおこってくるんですよ。これがある意味では「発心」というようなことにつながるようにも思えるんだが……。

宝田 その気持ちばかりですね。

松浦 そこで、こうしたニュアンスというものが、ボクたちのような年齢に達したものでばかりではなく、もっと若い世代の青年たちにおいても充分に理解されるし、実際にかれらの心の中にもちゃんとあるんだと思いますね。

宝田 そういう意味で、そうした人間のもっている根本的な感情を、ひとつの入り口へ誘導して、あるたしかな方向づけを与える、そういった仏教側の謙虚な努力が今日一番求められているんだと思うわけです。

寺内 唐の善導大師や鎌倉時代の法然上人は、とても新しい感覚で、そうした人間の感情を揺り動かしたわけだ。

松浦 そうなんだ。ところがやはりこの「南無の再発見」というか、この時代に仏教の側から新しい何もの

のような時代と環境風土にあって、一般民衆とともどもよく行動されたし、具体的によく努力されたということだな。

宝田 そのことなんですね。その時に、この『浄土』誌のような雑誌にしても、松浦先生のたずさわっておられる新聞などにしても、そういったマス・メディアを通しての布教活動が重要となってくる。しかも、現在これらの方向にかなり目が向けられ、新興宗教といわれる創価学会などのめざましい活動においても、既成宗教の側の一部の試みにおいても、現に幾つかの成果はあるわけなんです。ただそれにもまして、もう少し積極的な力を払うべきだということを重ねていいたいわけなんです。

松浦 たしかにその通りですね。強いはたらきかけの中にも心をもったやさしい努力でね。

寺内 いや、実際それこそ一番むずかしいことなんですよ。ね。(笑い)ともかく、もっと社会の中へ、人間の中へ、仏教の側から積極的に入っていくこと、そうすれば自然に活路も見出せるというべきかな。

松浦 そう、そういった中にこそそれぞれの時代の文化

を提起することは、実はなかなか容易でないわけだし、そのために努力して行動することは可能なか

寺内 そう、事実かの善導大師も法然上人も、ともにあがあり、宗教の存続もその中で培(つちか)われる以外の何ものでもないわけだから……。

——いやあ、たしかにその通りだと思います。われわれの側の努力ということこそ、もっとも基本的な重要なことであることを本日は十二分にかみしめさせていただきました。この『浄土』誌においても、本日提起された要請を真摯に受けとめて、より一層充実した内容とすべく、今後意を払っていくつもりですが、そのために諸先生に色々とお智慧を拝借することにもなると思いますが、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

まことに本日は長時間にわたって、忌憚のない、しかも示唆に富んだ有意義なお話をしていただいたことにありがとうございます。

(おわり)



食木の虫 しよくもく

— 〇 〇 —

アメリカのコロンビア大学の図書館の入口に、

「一カ国語しか知らぬものは国語を知らぬものである」

というゲーテの有名な箴言しんげんが刻み込まれている。それと同様のことを宗教学・神話学・言語学の泰斗マックス・ミュラーはいつている。

「一つの宗教しか知らぬものは宗教を知らぬものである」

浄土教の流れ

〆十五〆

竹中 信常 たけなか しんじょう

(大正大学教授・文博)

さいわいわが国は、外国の学者がいつているように、

「宗教の展覽会場」の観がある。神道、仏教はもとより、新旧キリスト教、数は少いが回教寺院もある。町には無数に近い新興宗教が氾濫している。だから、お好み次第の宗教が並んでいる。知ろうと思えば手の届くところに「宗教」が転がっている。ところが案外、日本人はほかの宗教を知ろうとはしないのである。浄土宗の碩学で、名著『三階教の研究』では恩賜賞の榮を得たことのある故矢吹慶輝博士は筆者の大正大学での恩師で、卒業に際して記念に色紙を書いて下さった。それには、

食木の虫、皮外の味を知らず

と漢文が書かれてあった。木の空洞に巣くう虫は、幹の内側にかくれてひたすら木質をかちつて生きている。木皮をやぶってそとへ出ようとしない。したがって、ほかの木をかちつたことがない。つまり、たまたま自分が棲みついた木の味しか知らぬのだから、木の味を知らぬものといふべきだ。人は大いにまなこをひろげ、さまざまのことを見聞し、多くのことを体験せよということ論された文なのである。

一年余、駄文を綴ってきた本稿の意図も、ほかならず、浄土教というものを本当に理解しようとするならば、それ以外の宗教、仏教のいろいろの系流はもちろん、仏教以外の宗教を並べこみ、両方を味わってはじめて、浄土教の味がわかるのだということをいいたかったからにほかならない。

— 〇一〇 —

もっともこうしたことはすでに多くの先学によって試みられており、宗教をひろく研究理解するためには、まづ二つ以上の宗教を比較し、検討することであるとされてきた。宗教研究の学問を最初に樹立した、先述のマッ

クス・ミューラーはその研究のもとをインドの宗教・神話と古代ギリシャ・ローマのそれとを比較することから始めたのである。つまり宗教を研究する学問は「比較宗教学」からはじまったのである。爾来、この学問は大いに発展したが、近來、再び、新しい形で「比較」ということがやかましくいわれるようになってきた。いささか専門的になるようだが、筆者の書架にある、仏教とキリスト教の比較について述べた本を拾ってみても、古くは、オックスフォード大学教授エストリン・カーペンター博士の著書『仏教とキリスト教』を昭和三年に増谷文雄氏がほん訳出版している。増谷氏はのちに氏自身の著述『仏教とキリスト教の比較研究』を昭和三十一年に出版している。その後、論旨はやや異なるにしても、仏教とキリスト教をテーマとした論考には、たとえば飯野紀元著『キリストと仏陀』（理想社・昭和三十二年刊）、ラサール著・柴田健策訳『禪とキリスト教』（春秋社・昭和四十二年刊）、岩本泰波著、『キリスト教と仏教の対比』（創文社・昭和四十九年刊）、石田充之・滝沢克巳編『浄土真宗とキリスト教』（法蔵館・昭和四十九年刊）、デューモリー著・西村恵信訳『仏教とキリスト教の邂逅』（春秋社・昭和五

十年刊、八木誠一著『仏教とキリスト教の接点』（法蔵館・昭和五十年刊）などがある。もちろんこれらのほかに雑誌論文も多くあるが、そのほかに、京都の百万遍の法主林靈法上人が昭和四十四年、ヨーロッパを旅行されて一本まとめておられる。『キリスト教と仏教の対話』（あそか新書）である。これはいわば旅行記ではあるが、仏教者としての林上人の透徹した視眼で、キリスト教の地盤に咲き出たヨーロッパの精神文化を犀利に批判し、ふりかえって日本仏教のあり方について深い示唆を与えておられる。つまり、他を知ることによっておのれを知るといふ、比較研究の要諦を示されたのである。その序文の一章を引用する。

「私は今度の視察を通して、ヨーロッパ各地において、仏教への関心と期待とが大きいことを知った。それは現代のヨーロッパの文明に対するヨーロッパ自身の反省と懐疑とからであろうか。この現実に対して、今後の日本仏教は世界的視野に立ちながらこれに答えなくてはならない。もちろん、それがためには自己自身の脱皮と生れかわりを必要とすることは言うまでも

あるまい……」

ヨーロッパを知ることとは日本を知ることであり、キリスト教を知ることとは仏教特に浄土教を見なおすことにはかならない。近來さかんに「比較思想」を提唱している筑波大学の三枝充恵教授は書いている。

「仏教とキリスト教との歴史をごく大まかに眺めてみると、多くの共通点類似点に気づき、ときには驚かされる。

まづ開祖教祖が登場する。それにはそれぞれの背景がある。原始教団が成立する。開祖教祖の一種の伝記風のものがつくられ、次第に神格化が進む。やがて教義がまとめられ、その肉付けがなされる。それはかなり長い歴史を要し、教義教理は体系化されて、確固たる学となる。やがて一種の改革運動が内部から現われて、明らかに異なる二大潮流が進行する。それを保守派と進歩派という枠でいちおう区分すると、保守派はこの分裂によって内部がかえって固まり、ほぼ統一された教団が維持されるのに対して、進歩派のほうは、

内部分裂がさかんで、種々の多彩な動きが展開する」

仏教とキリスト教とは、時代からいっても六百年近い隔りがあり、地域からみれば、仏教がインドでおこったのに対して、キリスト教はるか西方のイスラエルに発生した。民族の点では古代アーリア種族が仏教を生んだのに対して、キリスト教はセム民族であるユダヤ人の間に樹立されたのである。したがって神についての考えをはじめ、その教えの内容も儀式の仕方も異なったものであることはいるまでもない。それにもかかわらず、三枝氏も指摘され、また先に挙げた多くの論著の中にも示されているように、この二つの宗教が長い歴史を経て迎ってきたあら筋には、きわめて類似した共通の点が多いのは一体どういうわけなのであろうか。

— 〇二〇 —

一年有余にわたって本誌の紙面を汚しながらも、あえて浄土教の流れを辿ってきたのは、ほかならず、この疑問を解くためであった。もちろん、そのことが成功したとは思わない。むしろ、逆に、多くの疑問なり誤解なり

を生んだとも思われる。しかし、この二つの宗教が多く
の相異点をふくみながらも、今日、世界の宗教人口を大
きく分け持っているということには、なんらかの理由が
あるべきはずである。回教をふくめて今日、人類の信仰
を支えているこの大きな流れは、いかなれば、これら三
つの教（仏・基・回）がひとしく「宗教」という名で統括
されるからにほかならない。つまり真実の信仰というも
のは、時代人種国家文化のちがいを越えて、すべてに行
きわたるものである。なぜならば、宗教とは人類だ
けが占有する精神文化であり、他のいかなる生物にも、
動物にもこれを持つものはない。——ということとは、逆
にいうならば、宗教信仰を持つということが、人間を他
のあらゆる動物から区別することになるからである。犬
や猫が宗教を持つということはない。世の中には無信仰
の人もいるし、反宗教の人もいる。しかしそのような人
でも、自分は無信仰だ、自分は反宗教だと考えたり、思
ったりすること自体、その心の中はすでに信仰なり宗教
なりについてなんらかの考えを抱いている証拠なのであ
る。反宗教の代表といわれる共産主義が理想とする社会
は、金持や貧乏人の差別のない平等の世界であり、人々

はその働きに（労働）応じて正しい報酬を得て生活するという。しかし、このように平等で正しい社会とは、その根本に宗教でいう天国や浄土に通ずるものが必要ではない。つまりそれは人びとがお互いに信頼し合い、それぞれの能力を惜しみなく多くの人がとのために捧げるという「気持」にほかならない。この気持はなにも共產主義に限ったものではなく、仏教でいう菩薩道、キリスト教でいう隣人愛がこれであり、むしろ、宗教の世界でこそそれは実現されるべきなのである。だから、見方によれば、共產主義が理想とする「無階級社会」は宗教的な理想世界にほかならないとさえいわれる。

このようにして、姿や形はそれぞれ異なるにしても、人類が人類である最小限の公約数としての「宗教」であることには、仏教もキリスト教も差別はないのである。なぜなら、人類は一つだからである。人種のちがい、時代のちがい、身分のちがい、男女のちがい、その他一人として同じ人はいないといわれるが、同時にまた、どのような人種でも、どんな時代にうまれても、どんな身分のものでも「人間」であることには異なりはないはずである。この点にまで深く考えてゆくと、表面のちがいが

ど問題ではなくなるのである。くり返し引用して申しわけないが、法然上人と阿波之介とは、「人間」のレベルでは、つまり仏さまの目からみれば、いささかのちがひもないのである。このようにして、人間はすべてひとしく、人類は一つなのである。

一つである人間が辿る歴史もまた、その中にさまざまのものをふくみながらも、一つの大きな流れとなって今日にまで及んでいるのである。仏教だ、キリスト教だ、いや浄土教だとメクジラ立てて区別しても、それは所詮人類の歴史の表面に浮び上った「うたかた」の如きものであって、真実の宗教の本流は滔々として人類の未来に向って流れているのである。

浄土教もまた、すべての人びとを念仏の輪でつなぎつつ、人類の歴史の必然的な本流となつて、流れ来り、流れ行くのである。このことをいいたければ確かに、毎月駄文を綴つてここに至り、ようやく、筆を擱くのである。多謝。

（竹中先生の連載『浄土教の流れ』は、今号をもちまして最終回といたします。ご愛読ありがとうございます）

『大日経』はつづきには『大毗盧遮那成佛神變加持經』といい、サンスクリット名は mahāvairocanaśambodhi-vikurvāṭṭiśāna-vaipulyasūtrendra-raja-dharmaparyaya という。梵本は現存せず、チベツト訳と漢訳がある。本経は密教の根本所依の經典で、『金剛頂經』とともに「金胎两部の大經」といわれる。金剛界曼荼羅は『金剛頂經』によって、胎藏界曼荼羅は本經に

(お) (経) (の) (べ) (い) (じ)

だい
大 日
にち

きよう
經

よって図示されたものである。いわゆる密教では、宇宙すべてが大日如来のあらわれとすることから、その智徳をあらわす面を金剛界、理性をあらわす面を胎藏界とし、これら智と理が合一した絶対の世界を金胎不二という。本経はまさに胎児が母胎内ではぐくみ育てられるように、理性があらゆるものに内在して大悲によって守り育てられているという理の面を説くものである。

このような『大日経』は西インドにおいて、大乘仏教も後期に属する七世紀中葉頃の成立と推定されている。漢訳者は善無畏の三藏(六三八―七五三)であり、真言伝持の八祖(竜尊―竜智―金剛智―不空―善無畏―一行―惠果―弘法)の一人である。漢訳本は全七卷三十六品よりなり、第一入真言門住心品より第三十六真言事業品までであるが、このうち第三十一品までが『大日経』の

原本であり、唐の学僧である無行がインドより入手したもので、これ以下のものは供養次第法といわれ、善無畏が将来したものや彼自身が訳し、『大日経』に合本したものとされている。また本経の注釈書としては、チベツト訳と漢訳の注がある。漢訳本の注流をみると、『大日経』の前六卷の文義を解釈したものに行(六八三―七二七)の『大日経疏』二十巻と、同じく『大日経義

釈』十四巻があるが、前者は東密(真言宗)、後者は台密(天台宗)で依用する。

本経の内容をみると、教義を説いたものは初品の「住心品」のみであり、「第二入曼荼羅具縁品」以下は実修を具体的に説くものである。しかし密教の基本的立場は、住心品に体系的に説かれており、これを読めば密教思想のおおよその理解はできるであろう。たとえば、三句の法門、如実知心、六十心、百六十心、十縁生句等密教の重要な思想が説かれている。ちなみに三句の法門を簡単に示せば、「仏言く、菩提心を因と爲し、大悲を根本となし、方便を究竟となす」とある。この言葉は本経において非常に重要なものである。即ち、菩提心は無上菩提の因(種子)であり、ここに大悲を根本として因縁和合し、あらゆる実践修行がそのまま無上菩提につながることを説く。

このように『大日経』は密教思想を考える上でも、また弘法大師の思想をみる場合にもきわめて重要な經典である。

(K)



—元黒谷青龍寺参拝記—

宗祖を偲びて

わた なべ しず え
渡辺 静 枝

(愛媛県新居浜市順行寺中)

第八回浄土宗寺院婦人会中央研修会に参加し、その感激のあまりにペンを走らせることにした。

第三日目、いよいよ元黒谷青龍寺参拝の日となった。

十二時三十分、昼食が終って、一同和順会館の玄関に集合。十三時、バス二台に分乗して、五条通より白川通に出て、比叡山に向う。山あいをはた走り、奥比叡黒谷口にて下車。すでに知恩院のジープがまっていた。足の弱い方や老人の方を青龍寺まで乗せるためで、二往復されていた。私たちはあちらこちら紅葉しかけた谷間の景色を見ながら進む。台風による大雨のあとの山道、あちこちにバラスが入れてあり、ヒールをはいていられる方は

ちょっとお困りの様子。私と同室の上野さんは、足を怪我して、黒谷行を案じておられた。せっかくの機会ゆえ、行きたいのだがという上野さんに、私はジープをすすめた。しかし、若い者がはずかしい、とぼつぼつ歩かれ、私もその足に合せて歩くことにする。

「遠いかね、まだだろうか」、という声が聞える。二列に歩くどころか、もうばらばらである。

しばらく行くと、うしろの方から佐藤会長の声。「水引きの花がとてもきれいなね」とおっしゃった。私はふり返り、「会長さん、ジープではなかったのですか」とお尋ねする。「七十三歳の庵主様がご本山へ出られるた

び、この道を歩いて通われるのに、たまたま来た私たちが歩かなくちゃ。この道があるから、私は靴も服装も軽くしてきたのよ」とおっしゃった。本当に会長の服装は軽そうだった。

念願を果す黒谷秋の草

道々、なによりたのしかったのは奥比叡独特の、秋の草花がたくさん咲いていることだった。ススキの穂、萩が、水引きの花が、ほかの草花を一層ひきたてている。

奥比叡の水引きの花赤く咲く

黒谷に秋の七草あふれけり

しばらく行くと会長さんが、「もう少し行くと、このお山で修行半ばにして亡られたお坊さん方のお墓がたくさんあるから、皆さんにお詣りするよう伝えてちょうだい」とおっしゃった。私は少し走り、先の人に順々に伝えてもらうようなのむ。少し行くとお地藏さまがあり、その上にあるある、頭の丸い小さなお墓がたくさん

……。出家するには、それぞれに事情があったでしょうが、その方々が修行半ばにしてこの山奥で、大変ご無念であったことと、合掌しながら、機会があったら、またお詣りさせていただけますと、心に誓う。

修行僧の墓拝みけり秋比叡

ジープが、またひき返して来る。歩くこと約二十分、道は石段の下り坂となる。下の方にお寺の屋根が見えてきた。皆の足が早くなる。「いよいよ来たわね」「まあこの道を庵主様は登って下って、京都に出られるのは大変ね」、などと話すうちに元黒谷青竜寺に着く。

森尼上人が玄関で、出迎くださっている。会長が「庵主様、このたびはご縁あったのね、お参りさせていただきましたわ」と挨拶される。

大講堂で、一同お茶のご接待を受ける。庵主様一人で、私たちのためにお茶をわかしてお待ちしていただきました由。南無阿弥陀仏！

本堂にて勤行。このあと、庵主様のお力のこもったお諭し。法然上人が立教開宗までの二十有六年、この地で

ご苦労なされたお話の数々。法然上人がおこもりになって学ばれた経蔵・報恩蔵にも入らせていただき、いまだに寺庭婦人である喜びをかみしめた。

近所に家も寺もない、この大黒谷の谷底で、寒さの厳しい冬、湿気の多い梅雨期と、尼上人ただ一人で聖跡をお守りくださっているご苦労をお察しする時、ああ、本当に来てよかった、お参りさせていただき、ありがたいと思うばかりであった。

尼上人様、どうかお健やかにいつまでも、いつまでも御跡をお守りくださいませ、と念じて帰る。

坂道は、なんの苦もなく「私のために今日が、その今日は再び来ない、今日こそ大切に。私には阿弥陀さまが、法然さまがついてくだされる」、とくり返しお諭しくださった尼上人のお言葉、終生忘れられない。

帰途、もう一度修行僧のお墓に合掌。皆さん口々に来てよかった、よかったの声しきり。予定時間はかなり過ぎていた。ある人は新幹線のキップ買ってあるのよ、と心配しながらも、山すその花に見入り「この花珍らしいわ、まあきれい」とつぶやく。

秋草を摘む人もあり黒谷に
奥比叡秋草を摘む声高し

早く、急がなくては、といいながら、花を摘み摘み頂上へ。

頂上で京都駅、知恩院行とに分れる。知恩院へ帰られる方々と別れを告げ、バスは京都駅へ。十七時八条口に到着する。それぞれ別れを告げ、私は中・四国の方と来年鳥取での出会いを約し、上野さんとは近鉄電車の前で別れた。

再会を約し別れる秋の駅
秋晴や三門高く京望む
垣根ごし反禅苑に花咲けり

(知恩院・三門楼上より)

比叡越に行く近江路にうすもみじ
峠越す近江の里の落し水
粟一つ一つ供えて父祖の墓

(亡夫の里、伊香立へ墓詣より)
——昭和五十一年十二月記——

ニューオーリンズの墓

○

ニューオーリンズはアメリカ南中央部の活気みなぎる港湾都市でミシシッピ河畔の重要拠点を占める関係でこの地域一帯の商工業の中心地であり、フランス、スペインの植民地時代の面影を残しており正調デキシラーランドジャス発祥の地として有名でいわゆるオールドワールド旧世界と称されるヨーロッパの魅力と落着きをもった港である。

現在の人口は百万でその中の半数が黒人だといわれている。日本人は約二百人位が居住



磯貝基教
いそがいきょう

とのことである。私が訪れたのは十月下旬でニューヨーク、ワシントンでは木枯しの吹きすさぶ冬の一步前といった寒さであったが、ここニューオーリンズでは十月の平均気温は二十三度とのことで初夏といった感じであった。時差は十四時間である。

まづ驚いたことは観光案内人に空港からすぐにニューオーリンズの墓場につれてこられたことだ。思いもよらぬことで驚きであった。鉄筋又はコンクリート造り、石造りの白亜の墓が無数に順序よくゴバンの目のように整然と並んでいた。墓の大きさは二米四方位

で高さは三米位で、屋根には十字架やマリヤ像が立っていた。墓の正面の扉には死者の名前と出生年月日と死亡年月日がはっきりと刻まれてあった。

ニューオーリンズでは死者がでると教会にて慰霊式を行い遺体は土葬であったという。

然しこの地は海拔三五米という低地なので昔は土地がじめじめしていたので地中に棺をお納めることが出来ずに盛り土をして穴を掘りその中に棺を納めたといわれて、このような墓は一般にメテリー墓地といわれて市内の隨所にあつたのである。この盛り土の墓が現在の鉄筋石造りの墓となつたという。現在では告別式の後に、遺体はそのまゝの姿で石室に安置され礼拝されているとのことである。一年たつと骨になつた遺体を石室の下段の砂の中に埋めるといふ。墓前には石の花瓶が二個あり生花の供えられた墓もあつた。変わったものには合同の大きな石室もある。靈魂の不滅を信ずる昔ながらの変わった墓に私は驚異

の念にかられ、しばし合掌の誠を捧げた。

○

キリスト教では、天地創造の神がキリストを人間界に遣わして十字架の下に消えたが、キリストの復活を信じた。死者の靈魂が昇天するまで死者の保存を願ひ火葬を強く拒否して土葬としたのである。ハワイのパンチボールの墓地は平たい墓石一枚だけだ。ワシントンのアーリントン国立墓地のケネディの墓は土葬で平たい墓石一枚に一個の灯火が供えられてゐるのみで、現在は観光名所となり祈りを捧げる人はほとんどない。

インドのヒンズー教徒は男女子供供の遺体をそれぞれ赤白黄の布にまいて、ベナレスのガンジス河畔にて火葬に付して骨灰をガンジス河に流すことが最高の願だといふ。午前六時だといふのにガンジス河畔ではうす暗い内から火葬の煙が立ちのぼり、御来光と共に沐浴する者、台笠の下で経をよむ者、供養の花、

線香をうる店でごった返している。私達の乗る遊覧船の間をぬうようにボートにのり込んだインド人が骨灰を流している。このようにインドでは骨灰を河に流して決して墓は作らないとのことである。水葬である。

日本では、遺体の大部分が火葬にされ立派な墓地を造成して手厚く葬むられ、季節の花が手向けられ供養されていることはご存知。



ニューオーリンズで墓参りした因縁でジャズの話を書きたい。ここはジャズの発祥地である。ジャズは喧騒のものとしてみなされ、軽蔑する人が多いようだが、私が聞いたものは軽快で音楽的で節度のあるものである。バラバラなアンサンブルが不思議なスイング感をつくりだすのでありデキシードとアンサンブルと呼ばれるものである。ベニー・グッドマンやジーン・クルーパーなど日本になじみ深い人がここから出たという。この地の

随一の見所はフレンチクォーターの約十五キロの一面の中に、百五十年前の町並のまま残り、バー、レストランが密集して、十八世紀の飲食街のムードを漂わせている。スペイン風の建物はレース模様の鉄製のバルコニーのあるレンガ造りの家。パテオと呼ばれる石畳の庭。古道具屋街で有名なロイヤル通りにはフレンチクォーター最初の二階家など、そのまま土産品店やレストランとなつて残っている。路上では黒人がタップを踊り、ハットに投げ銭をもらっているのも趣があり面白い。デキシードジャズで有名なまじめの店に入つた演奏はクラリネット、サキソホン、ピアノ、ソロで約三十分の演奏である。テールはワインビルなど約三ドル程度で一回の演奏がきける。フンイ気はさわがしくなくまじめで紳士的である。ジャズの妙味は即興演奏の面白さにあるので、ショーマンのアイキョオで私達のために日本の歌も演奏してくれたのは大変うれしかった。

随 想

心のままに〔二〕

川内知光

念仏の功德（一）

初孫規子の四歳位の頃のことです。

大本山百万遍知恩寺に法話に行ったので
す。二席です。一席が終って休憩の時に、

「お宅から電話して欲しいとのことですが」

という伝言を受けて電話をいたしますと、
父に乗せられてスクーターに乗って交通事

故に会い、父の方はカスリ傷だったが規子
は鞍馬口のS病院に入院したというので
す。

二席目が終って執事長さんに、「あとの
話に何か変わったところがありませんでした
か」と尋ねました。「少しも気がつきませ

んでしたが何かあったのですか」と言われ
るので、「実は孫が交通事故で、今入院し
ております。済みませんがタクシーを呼ん
で頂けませんか」と言って、呼んで頂いた
車に乗りこみました。

さて、私がいつも実行していることで
すが皆さんもやって頂きたいのは、半眼にし
て合掌十念するのです。すると前方がバツ
と明るくなるのです。「助かる」と思っ
て、S病院に駆けつけたのです。受付はあるの
ですが、直ちに二階に上ったのです。規子
の泣声が聞えて来ます。部屋に入るとお婆
ちゃんに抱かれていた規子が、「お爺ちゃ
ん」と言って、私の方に寄ってきまし
た。規子は左眼の上から頭にかけて包帯をして

いるのです。家内は、「運良く宿直医が眼
科の先生だったので眼の手当をして頂いた
のですが、経過を見ないと分らないが、左
眼が悪化すると右眼に移移することがある
から、左眼はとってしまわなければならない
い」とのことです。私は「お婆ちゃん、心
配不要、二、三日で退院できるよ」と言っ
たのです。現に、全くその通りだったので
す。その孫は某女子大英文科を今年卒業し
て、英語塾などを開いたりして頑張ってお
ります。

皆様に申し上げたいのはお念仏で眼病を
直そうと思っただけじゃありません。こればかり
はただおまかせするのです。そしてただ一
向に念仏するだけで充分なのであります。

念仏の功德（二）

東京の大学に遊学中の女子大生らしいの
ですが、東京で拝み屋さんに見て貰ったら、
「お母さんの病氣は西方寺さんに拝んで貰
いなさい」と言われたそうで、私の寺にこ
られました。丁度その時はお彼岸の入りの

日で玄関が大変忙がしく、相手になつてい
る閑なんか全く無い頃だったので。そこ
で「一週間後にお願いいたします」と言っ
て帰って行かれました。

その夕方、私が藍綬褒章を受けた時に皆
様から頂いたお祝いの金子にて修復した開
山慈覚大師像が仏師屋から届いたのです。
夕方勤行の際に、慈覚大師の開眼をしてい
ましたが、その時御像がバツと明るくなっ
てくるではありませんか。

それから一週間程して八隅さんという未
亡人宅に月参りに参りましたら、「姉が大
変御世話になりましたとお蔭様にて近頃は便
所にも行けるようになりました」と言うの
です。「姉さんて誰のことですか?」「万徳
よねです」と言のです。その時は、「そ
れは結構なことです」と申すより仕方がな
かったのです。

念仏の功德 (三)

その万徳さんの息子さんが、Sさんとい
う会社の社長の自家用運転手をしているの

です。Sさんの本家の兄は大阪府T市の市
長を二期勤めて今は衆議院議員をしていら
れるのですが、Sさんは分家初代という訳
です。憲ちゃんという長男が琵琶湖にモー
ターボートに乗りに行つて突風に遭ひ、湖
に落ち、スクリーナーで腹を切られて即死し
ました。Sさんの家は商店街の街並で、京
都式の橋花を並べることができないもので
すから、儀式は西方寺ということになった
のです。儀式の日は橋花が両側に百米以上
も並んだような盛大な告別式だったのであ
ります。そして西方寺の檀家になられたの
であります。

念仏の功德 (四)

その憲ちゃんのお母さんが彼岸の入りの
日に来られました。「毎晩引続き憲ちゃん
の夢ばかり見て困る。まだ行くところに行
つていないで迷っているのじゃないか」と万
徳さんに聞かれて、私のところにこられた
わけです。私は夕方勤行の際、いつもの如
く拝んだのですが、一向に功德が表われな

いのです。これは駄目だなと思つてしまし
たが、お中日の夕、水蓮の花咲く池のほと
りに燈籠があつて、そのそばに黒い影が立
つてゐるのです。そして結願の日の夕には
一丈位の仏様が何体か並んでゐるところに
黒い影があるのです。結願が済んでお母さ
んが来られましたので、前の話をして、
「私は十数年前にお参りしたことのある南
山城の浄瑠璃寺でないかと思うのですが」と
申しましたが、お母さんはその翌日早速
浄瑠璃寺にお参りせられて来寺せられまし
た。色々とお話をしましたが、私が幻想し
た浄瑠璃寺とお母さんが実際に見て来られ
た事実と少しも変らなかつたのです。

「浄瑠璃寺は全く極楽そのもののような
お寺でしょう、憲ちゃんはきつと極楽に行
つていられますよ」と申しました。お母さ
んはその後は安心せられたのか、夢は見な
くなられたようであります。そればかりか
今では西方寺近くに家を建てて、和尚さん
のところ毎日もお話を伺いたいと申さ
れて、今土地を捜してあげている最中であ
ります。



法数術語補遺（三）

宝田正道
たから だ まさ みち

五百戒

比丘の二百五十戒（↓）に対して、比丘尼の具足戒を約二倍の重さに規定したもの。ただし、その数は必ずしも一定せず、三百四十八戒（四分律）など、多くは五百に達しない。

五百羅漢

仏滅後、第一結集（一説に第四結集）が行われた際、集った修行僧（阿羅漢）たちの数を五百としたところに根拠をもつらしい。主として禪宗などで重んぜられている

が、中国（福建省）の五百羅漢院をはじめ、わが国では、耶馬溪の羅漢寺や川越の喜多院その他の彫像、絵画などが名高い。

千ヶ寺詣（千社詣）

千という数を目標として各地寺院（後には神社も含む）をめぐる歩き、自分の生国氏名職業などを書入れた納札（千社札）を門の柱や堂の扉などに貼って歩く習俗。室町時代に始り、江戸時代に盛んになったものらしく、納札も板木で印刷したものや色彩豊かなものなどいろいろ工夫されて、観音の霊場巡拝と並んで今でも引続き行わ

れている。

千手観音せんじゆかんのん

千手千眼・千臂千眼観音ともいう。「千」は、実際にその数に達した図もあるようである（西域・チベット）が多くは廣大無辺の意を表わすとされ、普通は四十二臂、二十七面の形をとり、各の掌に眼をつけてあるのが特徴。延命とか滅罪除病など、千にものぼる功德をそなえた観音で、唐招提寺金堂の木彫立像（実際に千手をもつ）は有名である。

千体仏せんたいぶつ

阿弥陀・薬師・地藏などの小像を、群立させた彫刻や絵画。平安時代から起った造像供養の一形態であるが、インドや西域の石窟寺に多く見られる壁面仏の影響であることが知られる。鎌倉の長谷寺には、水子や亡亡供養並びに愛児の身心堅固を祈願して奉納された「千地藏」の景観があり、京都化野あかしの念仏寺にも、多少意味は違うが、無縁仏を集めた石塔群があつて参詣者の哀愁をそそっている。

千福輪相せんぶくりんそう

仏の具えている三十二相（↓）の一。足の裏に車の輪に似た模様の紋が千ある。

千仏せんぶつ

過去現在未来の三世にわたる三劫（無限に近い長時間を表わす）の間に、それぞれ千の仏が世に出るとされ、釈尊は現在の劫（賢劫）の第四仏に当る、といわれている。

千二百五十人せんにひやくごじゅうごにん

釈尊の説法される時、その会座に列する弟子たちの概数。經典には、開巻冒頭にこの数で列衆を示すことが、一つのタイプとなっている。一説によると、その内訳として、ヤサの仲間（五十人）、ウルベーラ・カッサパの徒（五百人）、ナディ・カッサパの徒（二百五十人）、ガヤー・カッサパの徒（二百五十人）、サーリブッタの徒（百人）、モツガラーナの徒（百人）の合計、すなわち、釈尊初期の入門者の内、主として迦葉三兄弟と舍利仏・目連の率いる弟子たちの数をトータルしたもの、とされている。

三千大千世界 さんぜんだいせんせかい

三千世界とも略称する。古代インド人の宇宙観による全世界。須弥山を中心として周圍に四大州、九山八海を置くのが太陽系を含むわれわれの住む小世界、これを千倍したものが小千世界、それを千集めて中千世界、さらに中千世界を千倍して大千世界と称するのが、その計算の基礎となっている。この大千世界は、小・中・大の三種の千世界から成っているのだ、三千世界は十億ということになり、これを一仏の教化する範圍（一仏国）とする。

五千四十八卷 ごせんじゅうはちかん

一切經の一般的な卷数。智昇の『開元釈經目錄』（唐の開元十年）によると、入藏の經論章疏すべてで五千四十八卷であったことに基づく。ただし、現行の『大正新脩大藏經』では実に三千五十三部一万一千九百七十卷の数を収めるというから、卷数だけでいっても実際には二倍以上に上る藏經があるわけである。

八千返 はっせんべん

つぶさには「往来八千返」という。釈尊は、久遠以来すでに八千返にもわたって衆生済度のためにこの土に來生しているのだ、決して菩提樹下で初めて成道したのではない、とする『梵網經』などの説。

四万六千日 しまんろくせんにち

觀音の緣日。七月九日または十日は觀音の特定の功德日であって、この日お詣りすると、一日で四万六千日（二説には九十日から四万二千日）參詣するのと同じ利益をこうむる、といわれ、浅草寺はじめ関東方面では特に賑わいを見ることが多い。四万六千という数のいわれは明瞭でないが、俗説によると、一升ます斛一杯に米を盛ると四万六千粒入るから、一升（一斗）安泰であるとゴロ合せを取入れたようである。

八万四千 はちまんしせん

「八万四千の法門」（→）その他、数の多い劫・歳・塔・相好・煩惱・病氣などに冠して用いる。「八億四千」

という場合も同じ。

十万億土
じゅうまんおくど

この娑婆世界と西方極樂世界との間にある仏土の数。
転じて西方十万億土にあるという極樂淨土をさす。

億劫
おく せう

百万塔
ひゃくまんとう

供養塔の一種で百千基の小塔。孝謙天皇の勅願により
天平宝字八年(七六四)四月、木造三重の小塔百万基を造
って露盤の下に陀羅尼の經文を入れ、法隆寺以下の十大
寺に十万基ずつ分置したもの。『無垢淨光大陀羅尼經』
の所説によったもので、現在法隆寺にあるその摺本は、
俗に百万塔陀羅尼と称して、世界でも最古に属する印刷
物と目されている。

百万遍
ひゃくまんべん

百万遍念仏を唱えること。また淨土宗大本山知恩寺の
別称。同寺では、八世善阿の時、悪疫退散のため七日間
にわたって百万遍の念仏を相続したが、その効験を嘉し
た後醍醐天皇から「百万遍」の寺号と千八十珠の大念珠

を下賜されたので爾來、災厄ごとに百万遍の念仏を修す
ることが例になったという。

百千億劫の略。限りなく長い時間で、永遠にという意
味もある。これから転じて物事をするのに気が進まず、
面倒くさいことを「おっくう」という。

五十六億七千万歳
ごじゅうろくおくしちせんまんさい

釈尊の入滅から当來仏の弥勒が出世するまでの年数。

昔の人は、この長い歳月の間、なんとかして生き長ら
えて、慈尊(弥勒)の出世にあいたいものと真剣に考え
たものである。それには、長命の動物として知られる蛇
体となって水中に棲むことが一番と信じ、実際に入水し
て果てた例を伝えている民話も、いくつかある。

たとえば、久安三年(一一四七)春、持宝房源光に伴
われて入門してきた、若い勢至丸(法然上人)を受け入
れて弟子とした比叡山東塔西谷功德院の皇円阿闍梨のご
ときは、その一人である。

皇円は、顕密の碩学^{せき}として名高く、また、すこぶる歴史の学に長じ、神武天皇以来堀川天皇に至る一千数百年間の史実を集録して『扶桑略記』三十巻を撰したほどの学究であるが、やはりこの世の生死輪廻を厭い、慈尊の出世にあうべく、遠江国笠原庄の「桜ヶ池」に大蛇として棲むことを願って命終したという。彼がなぜ海を嫌い、池を選んだかという、大海には、蛇を喰う金翅鳥という鳥がいて恐ろしいから、というから、いかにも学者らしくておもしろい。

その後、この池のほとりでは、静かな夜に振鈴の音が聞えると伝え、また、今日でも、早魃に際して近くの応声院（松風山）所藏法然上人の証鼓を池中で洗えば、たちまち雨が降る、といい、毎年秋の彼岸には飯食を池中に投じて竜神を祀る里人も多い、といわれている。

しかし、法然上人は、立教開宗の後、その師皇円のかかる行状を聞かれて、「智恵ありて生死の出でがたきことを知り、道心ありて慈尊にあはん事をねがふといへども、よしなき畜趣の生を感ぜること、しかしながら浄土の法門をしらざるゆへなり」と『勅修御伝』巻三十）嘆き自分がもう少し早く専修念仏の功德を知っていたら、信

不信をかえりみず、お教え申していたのに、とひどく残念がられた、という話が伝えられている。

一 好評発売中 二

松濤弘道著

既刊『仏教的生き方とは』

△浄土選書 1▽

新書判 二六八頁 価四八〇円

石上善応著

新刊『仏像——その語りかけるもの』

△浄土選書 2▽

新書判 二一六頁 価四八〇円

発行所 浄土宗 宗務庁

取扱 浄土宗出版事業協会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4



念佛ひじり三国志

(三五)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



明遍は耳をそばだてた。

俊乗房重源が興味をそそられる言葉を洩らしたからである。

「小松中将はこの高野山へ登ってくる前に、妙な人に会ったらしいな」

「妙な人……」

「法然房だ」

「いつ? どこで?」

おのれの反問が、性急になっているのを、明遍は感じないではおれなかった。

法然を意識しすぎる、と明遍はいつも自省する。

敬愛する兄の遊蓮房があれほど私淑した法然房ではないか。素直に彼の人徳を受容したら良いのである。

現実に、法然の評判は洛中で並ぶ者がなかった。貴賤を問わず、彼のことを悪しざまに言う人はいない。

ただの徳者であれば、明遍にも抵抗はないのである。

法然は、叡山でも智慧第一と呼ばれた碩学であった。

明遍も三論の学匠である。碩学学究と呼ばれる人間の体質を、わが身から照らして知悉しているつもりだっ

＜不動堂周辺＞



前号のあらすじ

文治元年（一一八五）夏、高野山恒例の万灯会に燈籠大臣として臨席した平維盛もやはり俊乗房重源の助命工作の恩恵を受けた一人である。後白河法皇の色良い返事を高野山に伝えたのは明遍僧都であつた。もともと真言密教を信奉していた明遍僧都は後年、高野山の東別所に蓮華三昧院をひらいて念仏生活にはいる。万灯会の席を出た明遍は、老いた山犬の、なんの気負いもない自然な死にざまを目撃して正念往生に心を傾ける。ところで、維盛は後白河法皇の返事を聞くや、心は京に残した妻子のことで一杯であつた。しかし、舎人の武里は頼朝が平氏の血筋をみすみす残さぬものと見て、明遍僧都から主維盛に観音の浄土に往生する補陀落渡海を勧めるよう、願うのであつた。これは明遍が抱いている往生相とはかけ離れたものであつた。

た。孤高狷介で、他には嫉妬深かつた。そのくせ人氣取りには軽薄な振舞に出る徒が多い。

法然の人氣も、その軽兆ぶりにあるのではなからうか。

屋島から脱柵した小松中将維盛が京へ立ち戻つたという話は聞いていない。とすれば法然自身がこの紀州辺りへやって来たのだろうか。

いつ何処で、どんな会いかたをしたのか。

明遍は突きとめたいのである。

「小松中将からじかに聞いたらよからう」

と、重源は知らぬふりをする。何度でもその話を聞いているに違いない。そういう態度を作るひじりであった。

維盛は、高野山にずっと登り口に近い不動堂を宿所にしていた。落人とはいえ平家の嫡子である。不動堂の周辺は幾人かの武士によって警固されていた。

舍人武里の名を告げると、

「明遍僧都におわすか」

と武士たちは通してくれた。来訪することが伝えられていたのであろう。

不動堂へ招じ入れられた。舍人武里は不在だったが、中将のかたわらに美々しい面立ちの僧形の者が控えていた。

昨夜、話に聞いた滝口入道にちがいない。

しかし明遍は、あえてこの入道を無視した。

「法然房に会われたということはまことでござるか」
いきなり本題へはいった。

ふとした偶然でめぐりあった、と維盛は答える。

屋島を脱柵した維盛は、内陸を供者多数と横行するの

もはばかれて、わずかな手の者と紀州那賀郡の粉河寺へ潜伏することにした。

この寺には父重盛が寄進した掲額があるはずだった。治承のころ、熊野参詣の途次、重盛はこの寺に立ち寄って一書をしたためたのである。

維盛は掲額のある観音堂へはいった。

父重盛はすでに亡くなり、平家の運命も大きく傾いているというのに、掲額に彫りこんだ文字だけは鮮明であった。それがかえって維盛に新たな涙を誘った。

観音堂の奥で三人づれの僧が熱心に念誦していた。僧たちはいずれも旅装であった。

もしや京都から来た僧ではあるまいか……と、供の与三兵衛重景という者を問わせた。やった。

京から来た者なら誰でもいい。一刻も早く会って言葉をかわしたい維盛であった。現在の様子が知りたい。勾いだけでもいい、都を肌で感じたかった。

「法然房とおっしゃるひじりの御一行だそうで」

「何と法然房……」

「殿はご存じで」

「お目もじしたことはないが、かねて噂は知っているお

方だ」

粉河寺における法然と小松中将維盛との偶会を「源平盛衰記」は以下のように描写している。

（法然は維盛に授戒したあと）戒師ノ戒ヲ授クルハ授戒灌頂トテ前仏ノ智水ヲ後仏ニ授クル意ナレバ此ノ戒ヲ受クルハ即身ニ正覺ヲ唱フル也。故ニ此ノ戒ヲバ一得永不失ノ戒トテ一度受ケテ後、永ク失フコトナシトゾ宣ヘケル。中将モ聴衆モ皆隨喜ノ涙ヲ流シケリ。ソノ後念仏ノ法門、弥陀ノ本願、コマコマト説キ給フ。様々教化セラレケルバ、維盛サルベキ善知識ト嬉シクテ、泣ク泣ク居室ヲ出デ給ヒケルガ、契アラバ後生ニハ必ズ参会スト宣ヒテ、ソレヨリ高野ヘ参リ給フ。上人モ哀レニ思シ給フ。遙ニ見送り奉リ、衣ノ袖ヲ濡ラシ給ヘバ見ル人袂ヲ絞りケリ。三位中将ハ高野山ニ参リツツ人々ヲ尋ネ給ヒケル。

この粉河寺に現れた法然房が実物であったかどうか。詮議する要はあるまい。それは過剰な情報に毒された現代人の病癖というものだ。

もちろん語る維盛も、聞く明遍も信じきっている。

明遍の抵抗感は消失した。法然は人気取りのために、京から落人の維盛に会いにきたのではないのである。偶然の邂逅であった。

また法然という人は、往きずりの人でもその貴賤を問わず、全知全能を傾けて説戒する徳者なのだ、ということも明らかになった。

「それは良いお上人にお会いなされた」

と明遍は言葉をあらため、膝を乗り出した。

維盛のかたわらに控える滝口入道へ、鋭い視線を投げた。

二

「心にいささかのお迷いもないはず。明朝にでも拙僧と京へご同道致しましょう」

「それが……」

と、維盛は弱々しい表情で、かたわらの滝口入道をかえりみる。昨夜の万灯会で、明遍がもたらした都からの「色よい返事」に小おどりした維盛だが、この滝口入道

から強くたしなめられたにちがいない。

だが、滝口入道は意地悪くおし黙っている。意地悪く、と言うよりも明遍の言葉をさらにくわしく聞きとおきたいのだ。

「それが？」

「鎌倉へ下向すれば、必ず首をハネられる、と入道らが申しておる」

その憂慮なら、昨夜すでに舎人の武里も口外していた。

「そのようなことは、運命でございます」

「運命……」

「あなたがおきめになることでも、鎌倉どのご意志でもありませんまい」

「いや、天下はすでに頼朝のものだ」

「ちがいます。鎌倉どのお考えにしても時勢一つで、どうにでも変るのです。わたしら兄弟にしても……」

と、明遍は平治の乱後における信西入道の遺児たちの運命に言及した。

明遍ら兄弟は、父信西の自害をみすみす傍観して世をしのんだ。義朝らのクーデターは逆転し、平清盛が政権を握った。清盛と一心同体だった信西入道の遺児たち

が、では引き立てられて旧官に復したか、と言えはそうではない。

政治情勢が変革したのだ。信西の遺児らが復活する余地はどこにもなかったのである。あれほどの俊才だった遊蓮房でさえ、出家したままで生涯を閉じなければならなかった。

「良き見通しが悪くもなり、悪しきものが良化することもあり得るのです。中将どのはこの運命にさからわずに家へお帰りなさい。法然房は、そうした進路を教えたはずです」

と、語りながら、明遍は何ものかに向って問いかけてみた。

果たしてそうかな。法然は維盛にそういう説得をしたのかな。

かりに、したとしても維盛の受容は万全ではない。現に鎌倉に下って首をハネられることを、こんなにびくついているではないか。

この時点で、明遍と法然とのあいだにはまだ広い空隙があった。明遍はじっくりと法然の所説を聞いたこともなかったのである。

「僧都は中将どのに虜囚の恥かしめを受けさせるおつもりか」

初めて滝口入道が口をひらいた。

昨夜の舎人武里と同じ論理だ。明遍は態度を硬化させた。

「虜囚の恥かしめ、とは何か。中将どのはすでに法然房から授戒されたと言うではないか。すでに武士ではない。出家ひじりだ。おぬしにしてからが、ここ高野にもる身、武士を捨てたのであらう」

滝口入道の口もとに陰影が落ちた。相手は当代きつての学匠である。討論しては敵対も不可能だった。

「いや、武士の立場で申しているのではありません。出家として正しい往生を中将どのに得てもらいたいと思ひまして」

「正しい往生……補陀落渡海か」

明遍は切りこんだ。もともと今日ここへ来た目的も滝口入道の仮面を引っ剥いでやりたかったからである。

「補陀落渡海が間違つた往生でございましょうか。明遍僧都がきわめられた三論義も究極は自力修行によつて仏果を得ることではありませんまいか」

「その三論義が、近ごろのわしには少し判らなくなった」
明遍は謙虚に自己を教晦させた。

法然の影像が心をかすめていったからである。

あの教えは、仏法として果たして正しいものなのであらうか。

主客が転倒する。滝口入道は言いつのはじめた。

「中将どのは都へ帰られる。そこで妻子に再会する。わが子を抱きしめるでしょう。また北ノ方と久しく遠ざかつていた閨にもはいられるでしょう。煩惱、妄執をよみがらせ、あげくのはだが屠所にひかれる家畜の如く鎌倉へ下つてゆかれます。そして首をハネられる。臨終のきわに、かほそく情けない声で念仏をとなえる。それで極楽往生疑いなし、ですか。人に喰われ、醜い死体をさらけ出して、何の阿弥陀仏の救いでしょうか」

「わしはな、昨夜病んだ山犬の死を見たのだ」

と、明遍は深夜の体験をぼつりぼつり語った。

だが、昨夜はこれで滝口入道や舎人の武里を説得できると信じきっていたのに、どうも話の歯車が噛み合つてゆかないのである。滝口入道の気迫のようなものに押しまくられてしまう。

「それこそ補陀落渡海の有難さを証かし立てるような話ではございませぬか」

と、切り返されるのである。

人間は自らの死を、自ら律しきれぬ哀れな生きものである。死に臨んで他人の厄介になり、死体までも葬ってもらわねばならない。しかも生き残った遺族は声をあげ、涙を流して訣別を悲しむ。

このように業（ごう）の深い身だからこそ、正しく修法し、自らの生命を断って、大海の底に往生するのだ。補陀落渡海こそは、人間に与えられたぎりぎりの、わずかな仏に至る手段ではないか。

と、滝口入道は主張する。

明遍はいつかその主張に耳を傾けている自分を知った。

法然なら、この主張にどう答えることであろうか。

やや意地悪く、軽い快感さえこめて、明遍は胸で反問していた。

だが、勝ちほこった滝口入道の冗舌が終ったとき、明遍は一つの像を透視した。それは眼前にいる滝口入道が、海上に浮ぶ小舟から殯船（もがりぶね）を凝視してい

る他日の姿であった。

「そのときお前は、どこにいる」

言葉鋭く叫んだ。

「お前はどこに……」

「中将どのが殯船に閉じこめられて、波間に船もろとも沈んでゆくとき、入道お前はどこで何をしているのだ」

「ご往生を見届けるのです」

「見届ける？ 何の資格があつてそんな立場になれるのか」

「それは……中将どのがわたしに帰依なさっているからです」

「お前は帰依を受けるような仏なのか。見届けたあと、お前は陸に上がるだろう。小松中将はご立派な最期をとげられた、と言ひふらすのだろう。するとお前の周囲には、第二第三の補陀落渡海を願う人間どもが沢山集ってくる。それは間違っている」

「どこが間違っているのですか。それこそ正しい仏法の布教ではございませぬか」

「それは間違っている。平等ではない」

「平等……」

「人間は平等に生きてよいものだし、平等に往生をとげられるはずだ。差別があるのがおかしい」

この時点における明遍は、自力法門の不平等性にナマな疑問を投げつけるだけの段階に身を置いていた。だから滝口入道のやりとりも、まともりのない激情だけで終止符を打たねばならなかった。

そうなのだ。そんな論争から明遍は今一刻も早く逃がれ出たかった。

聞法しなければならぬ。法然房に会って、じかに彼の考えを聞かねばならない。

「中将どの。京に帰るか、補陀落へ渡海なされるか。これはあなたご自身で定めることです。拙僧に傾いてもなりません。この入道の言葉に強制されてもなりません」
そう言い残すと、明遍はそそくさと不動堂をあとにした。まっしぐらに蓮華谷の別所へ走り帰った。

走り帰らずにはおれない明遍だったのである。

三

息をはずませて裏山へのぼった。俊乗房重源を探がし

求めた。弟子の話だと杉の用材を検分に出かけたそうである。

まだどこかに伽藍でも建てるつもりであろう。

重源は杉林の奥に、ひとり立っていた。裸身の女体でも眺めるように、惚々とした眼を高野杉にあげ、掌で幹を撫でまわしている。

「一度、法然房を招いて、ゆっくり話を聞きたい」

「法然の話か。何を聞く？」

「きまっておる。浄土の法門だ」

「そんなこと、知らないのか」

「経文は知っておる。それをこえた生きた話だ」

「生きた話か……」

重源はじつと明遍を凝視した。その真意をさぐりあてようと、視線をこわばらせる。

「中納言の法印を語らうたらいい」

「中納言の法印……大原にいる顕真僧正か」

「どうせ聞くのなら多数がいい。聞くだけではなく、みんなして法然を質問責めにするのだ」

重源の発想には、つねに「仕事」がからまる。もの静かな法話や清談とは無縁な男だった。法然房をかこん

＜杉の巨木と重源＞



で、とことん浄土の法門を聞き出そう。それが今日の社会に何らかの意義を、あるいは波紋を投げかけるであらう、と重源の頭脳はめまぐるしく回転するのだった。

「頭真僧正か」

明遍は口中で反芻してみた。

かつて最勝講での仲間だった。問答に失敗して座を追われ、大原に隠棲中の身である。禁中を去るとき、彼ははっきりと再出家のことを口外したのを明遍は思い出した。

あの僧正をまじえて法然からじっくり聞き出すのも得策だと思った。

彼は天台密教の碩学でもある。三論学匠の自分と並べて、法然房が二人を納得させるように説けたら、まさしく法然の称名念仏はほんものということになる。

「ところで小松中将はどうなった？」

重源は再び高野杉に戻りながら今日の首尾を訊いてきた。

「未だわからんな」

「滝口とか申す入道、ひと癖もふた癖もある男じゃから」

「うむ」

「どうしてあれでなかなかの仕事師だぞ。この山中にも、また山下の里にも沢山の信者をこしらえつつある。どうも武家とか官人という奴は、じきに結社仲間を作りたがるな」

「わしについて京へ帰るか。滝口入道の意のままになるか。中将も迷っている」

「明遍僧都。おぬしには学があるが、人を魅きつける徳が……と言つては正しくないな。熱氣みたいなものがない」

「熱氣か」

明遍は苦笑を結んだ。

そのとおりだと思ふ。

自分に限らない。父信西をはじめ、兄弟のすべてに共通したものが、その熱氣の欠乏であらう。いや、瞬間に燃え上がる感情は人並み以上なのだ。

持続力に欠ける。じきにさめるのである。事の理を、考えてしまうからであらう。

わずかな例外が、西山広谷で若い生涯を閉じた兄の遊蓮房円照であった。彼の出離の情熱は、最後までその炎

を絶やさなかった。

翌くる朝まだき。

明遍は蓮華谷の別所を立つた。

あえて維盛がいる不動堂へは寄らなかつた。京か熊野か。進路は彼自身が決定すればいいのである。

不動堂は高野の降り口に近く、明遍の行路にあたつていた。

堂がある丘を見上げながら歩いた。人影が動く気配がなかつた。

滝口入道や舎人の武里たちが、心弱き主君を押さえつけているのかも知れない。

山なみを、半道も下ったときだった。背後に足音を聞いた。まっしぐらに駆け降りてくる。

明遍は微笑した。

ろくに身なりもとのえていない小松中将維盛ではないか。もちろん供の者もない單身である。

「妻い会いたい。六代を見たい」

と、取り乱してわめいている。

監視を受けた寢床から、身一つで逃げ出してきたといった風体である。

「会ったらよろしい。愛児を見たらよろしい」

明遍はやさしく声をかけてやった。

「仏意にそむこうとも、ひと眼妻に会いたい」

まだうわごとのようにくり返していた。

これが人間の偽らぬ姿であろう、と明遍は思った。

高野の山影が遠のくと、維盛は落着きを取り戻し、話

に延命策というすえた現実感が漂いはじめた。

延命の筋道は一本しか残されていない。後白河法皇の

袖にすがりつくことだった。

「静遍僧正は、たしか僧都の兄者人」

「さよう」

「法皇は、あの僧正を師と仰いでおられる」

「師ではない。あの兄は、政略の裏表に通じた男。時

折、智慧をお貸ししている程度です」

「その政略だ。法皇にとって最大の関心事は安徳帝が持

ち去った三種の神器であろうが」

「さようですかあ」

「こういう手だてがある。このわしを源家の軍勢にまぎれこませ、一隊をひきいて屋島へ攻めこむのだ。わしが政略軍にいると判れば、心ある郎党はみな寝返ってくる。

る。その寝返りの条件に、神器を持ち出さなければならぬ。鎌倉どのにしても京の帝朝が神器を持っていないければ政治もやり憎いはず。のう、この手だては妙策であろうが」

「さようで」

と、適当に合槌を打っているしか、明遍はあしらいの方法がわからない。

人間の、それもかつて権力の座にいた人間の哀れな悪

あがきを目撃する思いであった。

なりふりかまわず妻に会いたい、わが子を見たい、と

一目散に高野の山道を駆け降りてきた姿には可憐さをお

ぼえたものだったが、いまは咽喉からヘドがあふれ出そうである。

傍若無人だった蹴鞠の維盛を思い出すばかりである。

「そのようなことは、京へ帰着したらゆっくりお考えに

なればよろしいでしょう。今は北ノ方や六代ノ君のお願

だけを思われるのです」

病者か狂人をいたわって歩を運ぶ旅になりそうであつた。そして京へ帰着すればするで、また厄介なことが山

積するであろう、と明遍は気が重くなった。

法然房に、親しく話を聞く場面を思いえがくことでその気重さをまぎらわした。

小松中将維盛は、これから無事に都へ帰着するのであらうか。

その後の運命に二説がある。

「平家物語」は高野山から熊野へ、さらに那智へ維盛をゆかせる。滝口入道らの念願どおり補陀落渡海を決行させる。

「源平盛衰記」は道を北へたどる、京都に戻り、妻子と再会する。維盛の画策も空しく、法皇もまたかかわりあることを避け、拜謁も許されない。

源家の兵に警固されて鎌倉へ下ってゆく。ただし頼朝と会うこともなく、相模の宿で斬り殺されるのである。

どちらが現実であったか。こんにちでは糾すべき手だてもない。

いずれにしてもこの公達に、生きる道は残されていなかったのである。源氏の手で殺されるか、補陀落渡海なる宗教的手段で、臣下に殺されるか、であった。

筆者に「盛衰記」説をえらばせたのは、ほかでもない。維盛の運命なぞ、どうでもよかったのである。

この小松中将を媒介して明遍の心が少しづつ法然に接近してゆく道筋をたどりたかったからである。

現実にはこの年が明けた文治二年、明遍は法然とあいまみえる。それも個人的ではなく「大原談議」という歴史の場で一種の対決を果たすことになる。

京へ維盛を連れ帰った明遍は、公達を北ノ方のかくれ家へ案内したことであらう。彼が弁じたのはそこまでで、維盛はじきに逮捕されたはずである。

明遍はもはやそのような俗事にはかかわりあってはおれなかった。

まっすぐに走った。走るようにして大原への道を急ぐ。そこで中納言法印と呼ばれ、のちに天台座主となつた顯真僧正が隠棲していたからである。

(つづく)

『浄土』誌購読希望者をご紹介下さい。 本誌も四月号からは内容を一新して、さらに誌面の充実をはかるつもりです。

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○この冬の寒気は、例年になくとくに厳しかったようだ。わが国でも、日本海に面した北国では連日の大雪が続き、暖かい地方でもいつになく雪の降る日が多かった。昨今、地球上の異常気象にとくに関心が示され、すでに氷河期の到来を予告する科学者も決して少なくはない。たしかに現実には冷害による作物の被害も大きく、今冬世界各地を襲った異常寒波には、私たちの背筋を震憾させるものがあった。

○しかし三月の声を聞いて、「三寒四温」といわれるように、季節のゆくりない変化は春のやさしいぬくもりを日増しに強く伝えてくれる。草木の芽ばえがことさらに新鮮であり、小動物の息づかいまでもほかに感ぜられるほどだ。冬ごもりの日々は終わった。長く貯えたエネルギーを活動させるための、その時がやってきたのだ。寒さにふるえていた私たちの身体もビーンとはり

つめて、まことに健やかである。今こそ私たちは臆してはなるまい。心、清明にしてさらに潔くありたい。

三月や風こそはゆく裾につく 尾上

貝買えは弥生の風の切と過ぐ 多希女

○ところでわが浄土宗では昭和五十五年（一九八〇）に、高祖善導大師（六一三—六一八）の千二百年のご遠忌を控えて、諸方面に渡ってその追善鑽仰のための準備がすすめられている。本誌でも、二、三の企画をもって『浄土』誌の一層の充実をはかりたいと思っている。三月十四日は、その善導の忌日である。宗祖法然上人が、「遍依善導（遍えに善導に依る）」といわれて、その宗義の標榜とされた善導その人の信仰姿勢は、有名な『観經疏』の冒頭に、「道俗時衆等、各々無上心を発すべし」と宣言されたように、専修念仏の一行に帰した強い信念に根差していた。今、春の彼岸会を迎えるにあたって、遠く善導大師の偲び、その強い信仰心を仰ぎたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十二年二月二十五日 印刷

昭和五十二年三月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』 春季号

新書判・表紙共 12ページ

定価 20円 (200部以上 19円)

- ◎ 檀信徒の皆様へのご施本用にごぞ広くご利用下さいませ。
なるべくお早目にお申し込み下さい。ご便宜はできるだけお
はかり致します。

＝好評発売中＝

大正大学教授 安居香山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250頁 定価 850円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく
人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の
歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問
題の書!!

— 目次 —

○ここにも大変革の予言がある○予言で定められた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡
んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして
歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

発売元 探 究 社

中住ビル3F

(振替) 京都 21185

取扱い 法然上人鑽仰会

〒102

東京都千代田区飯田橋1-11-6

振替 (東京) 8-82187